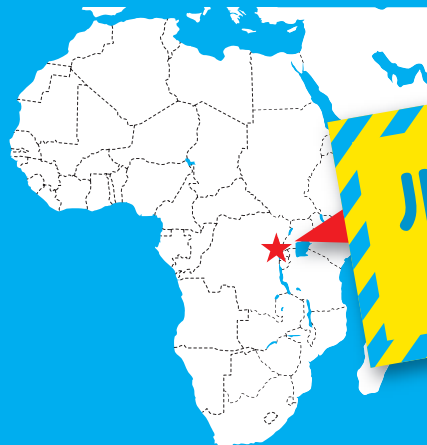


Asian Breeze

No. **63**
October
2011

エイジアン・ブリーズ63号 平成23(2011)年10月発行 年3回発行

ルワンダの首都、キガリ市内
丘の上まで家が建ち並ぶ



ルワンダ共和国より
レポートが届きました



キガリ市郊外の湖と
住宅街



ルワンダ人女性が
働いている工房の様子



「希望の村」でつくられた
伝統工芸品



虐殺を生き抜いた
女性たちを支える
ルワンダ人夫妻



いま、女性たちは……p. 1

第3次男女共同参画基本計画策定に携わって

実践女子大学 人間社会学部 教授 鹿嶋 敬

特別寄稿……p. 2

ルワンダからの特別レポート

「希望の村～虐殺を生き抜いた女性たちを支えるルワンダ人夫妻」

誌上セミナー……p. 3

デートDV－親密な人との付き合い方 再考(第2回)

アウェア代表 山口 のり子

ルワンダに関するレポートは
p.2で紹介しています♥

いま、女性たちは

第3次男女共同参画基本計画と “国際性”



鹿嶋 敬

実践女子大学教授
内閣府男女共同参画会議議員

鹿嶋 敬

第3次男女共同参画基本計画に何を盛り込むか。私も議員の一人である男女共同参画会議が、それを政府に答申したのは、2010年7月でした。それを受けて政府は同計画の策定を行い、第3次男女共同参画基本計画が2010年12月末に閣議決定されました。

5年ごとに見直しを行う男女共同参画計画とは、男女共同参画基本法に盛り込まれた理念を国の政策として具体化する、言ってみれば国家行政のアクションプランです。第3次基本計画が第2次のそれとはどこが違うのかと言えば、ひとつには第1次、2次は自民党を中心とする連立政権下、第3次は民主党を中心とする連立政権下だったこと、さらには国連・女子差別撤廃委員会からの我が国の男女共同参画の進捗状況に関する最終所見が2009年にあり、その内容を十分に意識し、かつ吟味しながら議論を進めなければならなかったことなどが挙げられると思います。

すなわち日本の男女平等も、国際社会の中でどのような評価をされているのか、このままでいいのかということを確認しなければならぬ時代状況が、議論の背景にありました。そのような問題意識の反映として、いや、成果と言った方がいいのでしょうか、第3次基本計画の冒頭に、「基本的な方針」として次のような一文を盛り込むことができました。

「男女共同参画に関して国際的な評価を得られる社会（を目指す）」

私は第3次男女共同参画基本計画を政府に答申するにあたり、起草委員会の座長を務めました。率直な感想を申し上げますと、この国では、男女の関係性を極めて保守的にとらえる人がいることは否めない事実だと思います。性によって男女双方の生き方を規定し、ジェンダー平等を突き詰めれば突き詰めるほど、それが伝統的な男と女の順風美俗を瓦解させ、ひいては家族、地域を破綻させるといった、イデオロギーの問題に転化させて議論の本質をそらすような傾向もあります。

また政治家も、男女共同参画社会の形成が必要なのだとは理解していても、選挙民と顔を合わせ、理念だけでは通らない現実と直面すると「21世紀の最重要課題」（男女共同参画社会基本法前文）はあえて後方に退けるケースもあるのではないのでしょうか。

第3次男女共同参画基本計画を答申するにあたってのスタンスは、そのようなジレンマを断ち切り、男女共同参画の推進に実効性を持たせることにありまし

た。幸い、2010年2月の男女共同参画会議では、閣僚の一人から、基本計画を「もっとエッジを効かせた内容にしないと社会が変わらない」という指摘も受けました。

そうした追い風を受け、答申ではポジティブ・アクションを積極的に推進し、国会議員女性候補者比率のクオータ制の導入等の検討をするなど、踏み込んだ提言をしました。そのほかにも、世帯単位から個人単位への制度・慣行の移行、男女が共に仕事と家庭に関する責任を担える社会の構築、男女平等に関する国際規範・基準の積極的な遵守などを盛り込み、幸い政府も答申のほとんどを政府策定の基本計画に盛り込んでくれました。

では、万事OKかと言えば、そうではありません。美辞麗句で飾った作文なら、誰だってできるのです。大切なのは、それが実現するかどうかなのです。なんと男女共同参画会議では、総理をはじめ男女共同参画担当大臣も、同様の趣旨の発言をしていました。

私自身も何度となく、男女共同参画社会の形成は、最後は政治の意志にかかっているという趣旨の発言を同会議でしました。当時、総理だった鳩山由紀夫さんは、政治の意志が希薄だと言われまいと頑張るとも言ってくれました。そうした発言をリップサービスに終わらせないためには、国民一人ひとりが監視の目を持つと同時に、グローバルな男女共同参画の視点でのウォッチも必要です。

その意味では、国連・女子差別撤廃委員会の見解などはいい刺激材料になっていると思います。日本は経済だけにとどまらず、男女平等という点でも、世界の先進国にならなければなりません。今は、そういう時代の転換期だと、私は確信しています。

鹿嶋 敬 Takashi KASHIMA

日本経済新聞編集委員等を経て、実践女子大学人間社会学部教授。内閣府・男女共同参画会議議員、ワーキングウーマン・パワーアップ会議代表幹事、財団法人女性労働協会会長を兼務。著書に『恵里子へ 結納式の10日後、ボリビアで爆死した最愛の娘への鎮魂歌』（日本経済新聞出版社）、『男女共同参画の時代』（岩波新書）など。



ルワンダからの特別レポート

「希望の村」

～虐殺を生き抜いた女性たちを支えるルワンダ人夫妻

会津 菜穂

Rwanda Report

夫の駐在に伴い、生後3カ月半の息子とともに、アフリカの小国ルワンダに暮らし始めて1年半になります。ルワンダというと、映画「ホテル・ルワンダ」などに描かれた大虐殺を多くの方が思い浮かべることかと思えます。一方で、大虐殺から17年が経過した今日、大統領の強いリーダーシップのもとで著しい社会・経済発展を続けているアフリカの中でも有数の国でもあります。アフリカのシンガポールを目指すルワンダの首都キガリは、標高が高いせいもあり、穏やかな気候で、見渡す限り丘の連なる非常に美しい街です。

こちらに来て間もない頃に出会ったのが、ニコラスさん、エルスーさん夫妻です。彼らは、2001年にイギリスからルワンダに戻り、「リンクミニストリー」という団体を立ち上げました。リンクミニストリー設立の経緯について、彼らのホームページには次のように書かれています。「リンクミニストリーの活動は、1994年の虐殺とそのトラウマを経験した後に真の癒しと和解を得たルワンダ人夫婦により始められました。彼らがイギリスで生活している間に、神の御業により、お互いが異なる民族の出身であることを乗り越え家族として暮らしていくことから深い癒しを得て、その後ルワンダに戻って国の再建と和解のプロセスの一部となることを決意しました。」



ニコラスさん、エルスーさん家族と（筆者後列右端）

ニコラスさんはIkirezi Natural Products（イチレジ・ナチュラル・プロダクツ）というソーシャルエンタープライズの経営者で、国内4カ所の有機農園で栽培された植物を原料とした精油を製造・販売しています。この農園で働く人のおよそ8割が夫を亡くした女性あるいは孤児です。主に南アフリカやイギリスに輸出して得られた収益は、働く人びとと地域社会に直接還元されています。私が彼と出会ったそもそものきっかけは、蚊よけ用に精油を買うため、息子をおんぶしながら事務所を訪れたのが始まりでした。その後、日を改めて車で4時間のところにある農園を見学させてもらい、帰りの道中さまざまな話をして帰宅したところ、「きっとよい話し相手になるだろう」と奥さんを紹介してくれたのでした。

エルスーさんは4人の子どものお母さんであり、リン

クミニストリーの共同設立者でもあります。ニコラスさんの農園では多くの女性が働いていますが、彼女たちの多くは大虐殺で夫や子ども、家族の多くを亡くし、家や畑を失いながらも生き抜いてきた人たちです。リンクミニストリーの活動の1つである「希望の村」では、こうした女性たちや世帯主になっている孤児たちに住居と癒しを提供しています。各家には3部屋の寝室、リビングルームと食卓、台所、洗面所が備えられています。多くの女性たちは空いている時間には家の軒先に集い、伝統的なアガセチェとよばれる籠細工やビーズ細工をしながらおしゃべりをします。エルスーさんは毎週木曜日の午前中にこの「希望の村」を訪ね、彼女たちとともに聖書を読み、お祈りをします。一人ひとりと個別に話をすることもあります。また、籠細工やビーズ細工の原材料と研修を提供しています。私がお邪魔したときには15名程度の女性たちが集まっていました。当時はまだ歩けなかった息子がハイハイして近づくたびに、みな大喜びしてあやしてくれたり、私が母乳をあげる様子を見てびっくりしたり（外国人は母乳をあげない、母乳が十分に出ないと思っている人が多いのです）していました。

「農園で働くことで当座の生活に必要なお金は手に入るけれども、それだけでは本当の意味で落ち着いた生活、そして心の平安を取り戻すことにはならない」とエルスーさんは言います。また、農園で働く女性にとどまらず、家庭内暴力や性的虐待などに苦しんできた女性たちを集めて、ミシンを使って手工芸品をつくるワークショップも首都キガリで開設しています。

我が家の息子の成長を自分のことのように喜んでくれる2人は、食事に招いてくれたり、自宅の畑で採れた野菜や果物を分けてくれたり、夫婦仲良く暮らしていくコツを教えてください、今では家族ぐるみの大切な友人です。彼らとの出会いがあったおかげで、ルワンダの人びとが困難な歴史を乗り越えていく1つの具体的な取り組みを直接自分の目で見ることができました。願わくば、成長した息子とともに、彼らの農園と「希望の村」をいつか再び訪ね、ニコラスさん、エルスーさん夫妻とゆっくりいろいろ語り合いたいなと切に思っています。

□希望の村（Village of Hope）

<http://www.hoperwanda.org/hope/pages/default.asp?pid=17>

Profile

会津 菜穂

国際基督教大学教養学部社会科学学科卒業。現在、独立行政法人国際協力機構（JICA）職員。農村開発部、青年海外協力隊事務局、理事長室勤務を経て現在育児休業中。国内外の農村、地域開発に興味をもつ。

デートDV

－親密な人との付き合い方 再考

第2回

「デートDVをもたらすもの」



アウェア代表 DV防止教育専門家
山口 のり子

DVがなぜデートする若者たちの間にもおきるのでしょうか。それはDVにつながるような、間違っていて危険な価値観を若者も大人と同じように学んで身につけてしまっているからです。DVの要因となる価値観とは、①力と支配 ②暴力容認 ③ジェンダー・バイアス（社会的・文化的につくられた性別・性差）です。実はこれらは誰もが大人より小なり学んでもっている価値観です。さらに若者の場合、④ゆがんだ恋愛観・交際観も大きな要因です。

力と支配

DVは「力による支配」ですが、これはDVやデートDVのほかにもさまざまな形で社会の中でおきています。子どもを「力で支配する」親は児童虐待する親だけではありません。多くの親が脅したりアメやムチを使ったりして、子どもを思い通りに動かしています。「親の言うことを聞けないなら出ていけ」や「成績がよかったらゲームのソフトを買ってやる」などが親から子どもへの「力による支配」です。また学校でも教師たちが生徒たちを威圧したり、脅したりして「力と支配」のやり方を見せています。大人が「力と支配」をするたびに、子どもは「力と支配」の価値観とやり方を学びます。そして誰かと付き合うようになったときそれを実行するのです。加害者は普通の家からも出てきます。普通の家にも間違った価値観が満ちているからです。

暴力容認意識

2つ目の要因は暴力を軽く考えることです。暴力はよくないと思っても、条件つきで認める人は多いようです。教育やしつけのためなら、正義のためなら仕方ない、男性の場合は少々暴力的でも仕方ない、愛情があればときには暴力も必要だ、などの考え方は根強いです。暴力は愛情ではありません。暴力は犯罪です。暴力は相手を深く傷つけるし関係を壊します。

ジェンダー・バイアス

DVは同性間の親密な関係でもおきています。「力と支配」の価値観や暴力容認意識を誰もが大人より学んでもっているからです。しかし女と男のカップルではDVの加害者は圧倒的に男性です。理由は3つ目のジェンダー・バイアスが大きく関わっています。社会

的につくられた「女らしさ、男らしさ」「彼女らしさ、彼氏らしさ」「妻の役割、夫の役割」などの意識をもっていない人はいません。それらは日常生活に溢れていて、皆が知らないうちに意識の中に刷り込まれるからです。その結果、大人だけでなく若者もそれらの価値観を当たり前のように思っています。ジェンダーは若者たちが目にする漫画や雑誌に、テレビドラマや映画や小説に、聞く歌の歌詞に、親や教師や仲間などまわりの人たちの言動に常に織り込まれています。だれもが生まれた日からジェンダーをシャワーのように浴びるのです。ジェンダー意識をもっていることに気づかないふたりが親密な関係になると、「男らしさ」や「彼氏の役割」意識は、男性が女性に対して優位に立つことにつながりやすく、「女らしさ」や「彼女の役割」意識は、男性にとって都合がいいので女性に対するDVがおきやすいのです。

ゆがんだ恋愛観・交際観

恋愛や交際について現代の若者がもつゆがんだ考えで顕著なものは、「付き合うことはお互いに束縛すること」という考えでしょう。携帯電話の普及は若者たちが束縛し合うのを容易にしています。ですから女性も男性も同じように相手の行動を束縛しがちです。また若者たちは、交際相手を得ることが一人前として仲間に認められることだと考えているようです。ですから、束縛から暴力へと進んでも、交際をやめるわけにはいかないと考えがちです。また束縛も強要も暴力も愛情表現だというゆがんだ恋愛観を多くの若者がもっているため、加害をしている側も被害にあっている側もなかなか気づけません。

このような若者のゆがんだ恋愛観・交際観の中には、ジェンダー・バイアスを基にしたものが多いので、男性から女性へのDVが当然多くなります。しかし男性から女性へのDVが多い理由はそれだけでなく、背景に社会が男性優位であることが大きく関わっています。女性の人権が守られていない社会構造の中で、人々がジェンダー・バイアスをもって暮らしているからです。社会的状況が個人的な男女の関係に影響してDVがおきているのです。親密な関係でおきている女性への暴力は、女性差別の一形態であり、女性への人権侵害なのです。

東日本大震災復興に向けて女性の視点を ～北九州からの発信

第3次男女共同参画基本計画において取り組みが拡充された第14分野「地域、防災・環境その他の分野における男女共同参画」が本格的に実施される前に、東日本大震災が発生しました。阪神・淡路大震災や新潟県中越地震などの教訓を踏まえ、日本全国的女性団体・個人は男女共同参画の視点からの震災への対応を要望するとともに、支援活動を行っています。

6月11日には、「災害・復興と男女共同参画 6.11シンポジウム」(主催 同実行委員会、日本学術会議 人間の安全保障とジェンダー委員会)が開催され、被災地からの報告、研究者による講演、パネルディスカッションなどを通して、男女共同参画の視点から被災者支援・復興に向けて議論しました。シンポジウムで採択された要望書では、東日本大震災復興構想会議の委員15名中、女性が1名であることから、特に災害復興政策の意思決定の場への女性の参画を求めました。

北九州では、「2011全国フェミニスト議員連盟夏合宿 in北九州」が7月30・31日に開催され、第2日目の分科会2で「震災と女性～これからの地域づくり」をテーマとし、実行委員の1人として太田まさこがコーディネーターを務めました。①地震の被害を受けた宮城県加美町から伊藤ゆう子町議会議員が、議員および女性としての視点から被災地や支援の現状、②北九州市消防局危機管理室、田中直樹危機管理課調整係長から津波の被害を受けた釜石市での支援活動、③福島県飯館村

で自然農業を営む村上真平氏が福島原子力発電所の事故後、三重県に避難された状況、④RQ市民災害救援センターに個人的にボランティアとして参加し、宮城県気仙沼市の避難所で行った活動について太田から、それぞれ報告しました。

⑤土田久好北九州市消防局危機管理室長からは、同市の防災対策と東日本大震災の教訓を生かして災害の被害を最小限にとどめる取り組みについて説明がありました。北九州では、防災会議に67名中8名の女性が、有識者による地域防災計画見直し検討会には11名中5名の女性が参加しているほか、ハザードマップづくりや防災啓発活動が盛んに行われています。参加者からは、女性や高齢者の支援、防災会議や災害マニュアルの実効性、消防における女性の登用などについて、活発な意見や質問がありました。

被災者の方々が、一日でも早く「非日常」から「日常」の生活へ戻るために、私たちは長期的な支援を行っていくことと、この分科会で報告されたさまざまな事例を参考に、女性の視点を取り入れた災害に強い地域づくりをそれぞれの街で行っていくことを確認しました。

KFAW 主任研究員 太田 まさこ



3月11日の東日本大震災を経験して、震災や災害の際の救援のあり方や日本赤十字社の発足や歴史的変遷、組織や役割についてお話いただきました。

アンリー・デュナンが1859年ソルフェリーノの戦いにおいて「傷ついて戦えない兵士は、敵味方なく、ひとりの人間としてたすけるべきだ」と訴えたことから始まった赤十字社は、その着想から150年を迎えました。現在、赤十字・赤新月社は世界の186カ国に広がって、「人道、公平、中立、独立、奉仕、単一、世界性」の7つの基本原則の下に活動しています。平時から救護班を編成し、救護要員の訓練を行い、災害時に備えるとともに、迅速、かつ効果的な災害救護活動を行うためのボランティア育成にも力を入れています。今回の災害においては、災害発生の当日から新潟県の病院から日本赤十字社のチームが救援に出ました。

救援のあり方については、平時からの準備とネットワーク構築の必要性とともに、自分でできることを為す自助、自分でできることを他人のために為す共助、自分たちでできないことの援助を受ける公助、の3つが行われるべきであることが話されました。

また、災害の際の住民の避難率が年々低下していることなどが指摘され、歴史は繰り返しているのも、過去の犠牲を風化させず、次の世代へ伝える教育が重要であること、戦略的に防災対策を行うことが必要であることなどが訴えられました。

詳細はホームページに掲載しています。(http://www.kfaw.or.jp/report/cat85-1/)



(財) アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW) では、毎年、独立行政法人国際協力機構 (JICA) 九州国際センターの委託を受け、開発途上国のジェンダー主流化を担当する中央政府および地方府の行政官を対象に研修を実施しています。

当研修の目的は、開発途上国において、男女共同参画社会実現に向けて、ジェンダーの視点を主流化する施策を総合的かつ効果的に推進することができる行政官を育成することです。

今年は、2011年6月15日から7月22日まで約6週間にわたり、5カ国から7名の研修員を受け入れ、研修を実施しました。

研修は、はじめにJICA東京国際センターで約2週間、男女共同参画に携わる行政の担当者やジェンダーに関する専門家が講師となり、日本におけるジェンダー主流化政策の総論としてさまざまな角度から講義を行いました。なお、研修員のそれぞれの経験や各国で抱えるジェンダー問題や課題を共有する発表・ディスカッションも取り入れ、より理解を深め充実した内容でした。

その後、北九州のJICA九州国際センターで、さらに具体的な側面 (教育・農村・地方行政など) からジェンダー視点の講義や現場視察を実施しました。また、研修は講義形式だけではなく、実際に、行政官として自国でのジェンダー主流化政策を計画・立案・実行するための、スキルを身につけるワークショップも取り入れ、研修の最後には研修中に策定したそれぞれのアクションプランを発表するという、充実した研修プログラムでした。特に、より論理的で実践的で効果的なアクションプランを策定するための「ジェンダー配慮PCM (プロジェクト・サイクル・マネジメント)」は、研修員にとって非常に有意義

な研修であったと思います。

加えて、一般市民の方との国際交流も兼ねた視察プログラムがありました。中でも、各国情報やジェンダー問題とその課題解決のためにアクションプランをまとめた、市民向けのカンントリーレポート発表会や、北九州市内の保育園や小学校での子どもたちとの触れ合いは、ジェンダー主流化に必要な知識とスキルを学ぶと同時に、文化や言葉の違いを超えた、素晴らしい国際交流でした。



▲小学校の子ども達と

カンントリーレポートの内容はホームページよりご覧になれます。 <http://www.kfaw.or.jp/report/jica/>

KFAW第21期海外通信員がスタート!

テーマ 「今どきの若者文化と男女共同参画」

(財) アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW) では、アジア・太平洋諸国を中心とした海外との幅広いネットワークを形成するために、1991年から海外通信員制度を設けています。これまでの通信員は38カ国延べ257人となりました。

今期は、5カ国の皆さんに通信員をお願いすることとなります。このネットワークを通して、各国から最新の情報をお伝えします。

第1回リポートは、KFAWホームページ (<http://www.kfaw.or.jp/correspondents/>) に掲載しています。

中国 (香港)
合田 美穂さん



大学および大学院博士課程の時にシンガポール国立大学に留学し、シンガポールの華人社会についての調査・研究をしていました。

現在は、香港中文大学の歴史学科および日本研究学科にて中華社会 (主に香港) における高機能広汎性発達障害児への支援についての調査・研究を行っています。

インドネシア
ムハマド・スプハンさん



2006年に来日し、現在は国立大学法人・九州工業大学大学院で先端機能システム工学を専攻しています。学生であると同時に2人の子どもの父親として、家事・育児に奮闘中です。

また、インドネシアのことをもっと知ってもらうために、地域との交流活動にも積極的に取り組んでいます。

2011/12年度KFAW客員研究員および研究テーマ紹介

農村女性起業家の事業継続を支援するための調査・分析・ネットワーク開発に関する研究

客員研究員

法政大学兼任講師
岡部 佳世



共同研究者

恵泉女学園大学兼任講師
臼 まゆみ



日本で女性が働き続けることには、さまざまな困難が伴うと言われてきたが、近年、女性自身が事業を興し活躍する場を作り出し、働き続けやすい環境を整えることも可能になってきた。本研究では、そのような女性の起業継続に必要なエンパワーメントについて農村女性起業家を対象に調査と分析を行う。第1に、起業および事業の継続のために必要なエンパワーメントに関して実績を挙げている起業家グループに対して聞き取り調査を行う。第2に、その結果をもとに事業の継続を難しくする要因についてアンケート調査を行う。第3に、その調査データを経済学および地理的要因から分析を行う。第4に、分析結果を事業継続のための支援情報としてホームページを作成し、女性起業家の情報共有ネットワークのプロトタイプとして公開する。有益な情報をインターネットで共有することで、日本の、さらにアジアの女性のエンパワーメントへの貢献をめざす研究である。

アジア地域における移行経済国から日本への女性の結婚移住—インドシナ難民家族と滞日中国人家族における移民女性の事例から—

客員研究員

東京外国語大学多言語・多文化教育センター
特任専任講師
長谷部 美佳



共同研究者

首都大学東京 博士課程在籍
王岩



本研究は、ベトナムと中国という社会主義政権で同時に経済の移行国である2カ国から、日本へ向かう結婚移民の女性たちに対する送出国/受け入れ国双方での、構造的ジェンダーの影響と、それに対する女性の主体性のあり方を比較検討するものである。これまで結婚移民は、移民研究の分野においても、ジェンダー研究の分野においても、ほとんど注目されてこなかった。しかし、日本においても、日本に在留する移民の総数に占める割合も高く、また同時にそのほかの移民女性と同様、構造的なジェンダーの影響を強く受ける。こうした構造的な制限のある中で、結婚移民の女性たちは、主体的に選択した結果として移動を行っている。本研究では、結婚移民の主体性に焦点を当てることの重要性を前提に、結婚移民の送出国、受け入れ双方の社会におけるジェンダーの影響を考察し、2国間での比較検討をするものである。文献調査のほか、聞き取り調査を行う。

韓国

ホン・ミオクさん



1992年に仁川広域市の公務員になり、2008年～2010年まで、仁川広域市の姉妹都市である北九州市と相互に行っている職員交流派遣制度により、北九州市国際部に勤務していました。

現在は仁川広域市の職員として勤務する傍ら、2人の子どもの母親として頑張っています。仕事と家庭の両立は難しいですが、どちらも充実させて楽しく過ごしていきたいと思っています。

マレーシア

チョウ・プエイクエンさん



マレーシア理科大学でインテリアデザインの学位を取得後、将来的には教育の分野で活躍することを目指し、東京大学大学院で工学系研究科建築学を専攻し、修士課程を修了しました。現在は同博士課程に在籍しており、人間・環境学について研究をしています。学会で北九州市を訪れたことをきっかけにKFAWを知り、第21期海外通信員としての活動をスタートさせました。

ネパール

ブハワナ・ウパデヒアユさん



これまで国内外のさまざまな機関で、研究者、開発者として働いてきました。私の活動は国際ジャーナルなどでも紹介されています。記事の一部は、こちらからご覧になれます。
(<http://www.ekantipur.com/2011/04/07/oped/her-reproductive-choices/332117.html>)

活動報告

デートDV予防教室活用セミナー

高校、大学、専門学校等の担当教職員を主対象に、デートDVに対する理解を深めていただくとともに、効果的なDV予防と学校教育に期待される役割について考えるセミナーを開催しました。

北九州市では、2009年に「北九州市DV対策基本計画」を策定し、DV防止のための人権教育や啓発活動に取組んでいます。最近では、未婚の親密な間柄の男女間で振るわれる暴力、「デートDV」が大きな問題となっており、国や北九州市でも、若年層における予防啓発を強化しています。当財団では、市からの委託により、本年度、デートDV予防教室を市内の高校、大学などで開催します。

DV防止教育専門家、山口のリ子・アウェア代表を招聘しての第1部の特別講演では、学校教育だけでなく、保護者として、あるいは大人として、社会全体として取組む必要性が強調されました。

続く、第2部では、当財団の篠崎正美主席研究員による「デートDV予防教室」の授業デモンストレーションが行われ、効果的な若年層への啓発方法について活発な質疑応答が行われました。



UN Women北九州

UN Women 北九州では、毎年ムーブフェスタ期間中に募金活動、講演会やさまざまなイベントを開催しています。

今年も、市民の皆さんとふれあう機会をもつため、次の3つのイベントを行いました。

- UN Women チャリティーバザー
- 女性のための護身術“Wen-Do講座”
- 「タブー パキスタンの買春街で生きる女性たち」講演会

▽Wen-Do 講座の様子



・収益金は全額UN Womenへ寄付させていただきました。

・詳しい活動報告を<http://www.kfaw.or.jp/report/>で紹介しています。

CSW55 帰国報告会

国連経済社会理事会のNGO協議資格を有する、(財)アジア女性交流・研究フォーラム(KFAW)は、毎年国連女性の地位委員会(CSW)に参加しています。2010年度は、国連本部のあるニューヨークを訪問し、CSW55パラレルイベント「日本の農山漁村女性のエンパワーメント」にパネリストとして篠崎主席研究員が参加しました。

今回の参加報告会では、まずUN Women 日本国内委員会副理事長、UN Women北九州会長の三隅佳子氏にUN Women発足についてお話をいただき、その後、篠崎正美KFAW主席研究員が、参加報告を行いました。

CSW55パラレルイベントのテーマは来年のCSW56の優先テーマRURAL WOMEN(農山漁村女性)を先取りして行われたもので、日本の農村女性の実情を報告するものでしたが、この問題については参加者の方の関心も強く、質疑応答の際にはたくさんの意見が交わされました。

お知らせ

ホームページリニューアル



<http://www.kfaw.or.jp>
ぜひ一度ご覧ください(°д°)

今後のイベント案内

- ・アジア女性会議一北九州
平成23年11月26日(土)～27日(日)
- ・ワールドリポートセミナー
「東アジアの若者はいまー日本のマンガ文化を中心に(仮)」
平成24年1月28日(土)
- ・デートDV予防教室の講師を派遣します!(無料)
北九州市内の高校、短期大学、大学、専門学校などにおける授業、ゼミ、研修会などに、講師を無料で派遣します。人権、DV予防教育の推進に、是非この機会をご活用ください。

お問い合わせは(財)アジア女性交流・研究フォーラムまで